The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	《翻訳・解題》ピエール・ニコル「プリズム、またはさまざまな態度が他の対象を違った仕方で判断せしめること」
Author(s)	川上, 紘史
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2020, 54, p. 21-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《翻訳・解題》ピエール・ニコル「プリズム、またはさまざまな態度が他の対象を違った仕方で判断せしめること」

川 上　紘 史

キーワード：『道徳論』／モラリスト／ジャンセニスム

解題

本稿はピエール・ニコル Pierre Nicole（1625-1695）の主著『道徳論』*Essais de morale* に収録されている「プリズム、またはさまざまな態度が他の対象を違った仕方で判断せしめること」« Le Prisme, ou Que les différentes dispositions font juger différemment des autres objets »（以下「プリズム」と略す）の全訳である。

おそらく著者の名は一般にはほとんど知られていないだろう。仮に知られていたとしても『論理学あるいは思考の技術』*La Logique, ou l'art de penser*（1662）、いわゆる『ポール・ロワイヤル論理学』の共著者、あるいはジャン・ラシーヌ Jean Racine と対立した演劇の批判者として知られるにとどまるように思われる。ましてや主著の『道徳論』については一層知られていないだろう。そこで解題としてニコルの生涯、『道徳論』の成立過程、「プリズム」翻訳の趣旨を述べておきたい。

まず、ロラン・ティルアン Laurent Thirouin が語り手の動画 SAPR Société des Amis de Port-Royal, *(55) Les Minutes de Port-Royal, "Pierre Nicole, ou de l'art d'être ordinaire"* に主に依拠してニコルの伝記的事項を確認しておこう。

ピエール・ニコルは神学者にしてモラリストである。フランス中部のシャルトルに生まれた。父の教育によって、14 歳の時にはギリシャ語、ラテン

語を十分に読解することができた。コレージュ・ダリクールを出てからソルボンヌ大学にて神学を学び始める。この時、ポール・ロワイヤル Port-Royal（ジャンセニスムと呼ばれる神学思想のフランスにおける中心地となった女子修道院）に親和的な人たち（大学での指導者であったジャック・ド・サント－ブーヴなど）と親交を結ぶ。1649 年には神学のバカロレア Baccalauréat（アントワーヌ・フュルチエール Antoine Furetière が編纂した十七世紀の辞書『万能辞典』*Dictionnaire universel*（1690 年版、以下 *Furetière* と略記）によると「神学、医学、民法及び教会法の学識に対して授与される大学における最初の学位」le premier des degrés qu'on donne dans les Universités pour les sciences de Théologie, de Médicine, de Droit Civil et Canon）を取得する。当時パリ大学神学部はジャンセニウスとその支持者の神学説、いわゆるジャンセニスムに対し激しい攻撃を始めたところであった。恐らくはこの情勢のため、ニコルは上級学位であるリサンス licence、ドクトラ doctorat の取得を諦める。その結果、彼は叙階されていない剃髪した聖職者としての生を歩むこととなる。

パリの南西、シュヴルーズの谷に位置する田舎のポール・ロワイヤル Port-Royal des Champs で開かれていた小さな学校 Petites écoles でニコルは教鞭をとる。彼はそこで哲学、古典学を教えていた。教え子には後の大劇作家ラシーヌもいた。

1654 年から 1668 年にかけて、ニコルは自身のラテン語運用能力を活かして、ポール・ロワイヤルの霊的指導者の一人であった神学者アントワーヌ・アルノー Antoine Arnauld とともに活動した。二人の共著として、『論理学、あるいは思考の技術』が知られる。ニコルはこの論理学の教科書の特徴の一つである道徳的部分を担当した。

1656 － 1657 年にかけての『プロヴァンシアル』*Les Provinciales* 運動にもニコルは関わっていた。1657 年に、ニコルは、ブレーズ・パスカル Blaise Pascal によって書かれた 18 通の書簡形式の論争文書を一冊の本にまとめ、序文を付した。翌 1658 年には、ギヨーム・ウェンドロック Guillaume

Wendrock の筆名で、注釈と付録をつけた『プロヴァンシアル』ラテン語訳を出版する。その注があまりに見事であったことから、このラテン語訳は十七世紀末にジョンクー嬢 Mlle de Joncoux によって再びフランス語に訳されることとなる。

1662 年、パスカルが死ぬ。彼の遺稿を出版しようという近親者及び友人からなる計画にニコルも参加していた。この計画は 1670 年に『宗教と他の幾らかの主題に関するパスカル氏のパンセ』*Les Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets* の出版によって結実する。この準備と並行して、ニコルは1666年に、『プロヴァンシアル』と同じ全18通からなる『想像上の異端についての手紙』*Les Lettres sur l'hérésie imaginaire* を出版している。

1668 年からの教会の平和 Paix de l'Église あるいはクレメンスの和解 Paix de clémentine と呼ばれる時期に、ニコルは自らの代表作となる『道徳論』の出版を始める。しかし、1679 年 4 月 15 日にポール・ロワイヤルの有力な庇護者であったロングヴィル公爵夫人 La duchesse de Longueville が亡くなったことでポール・ロワイヤルに対する迫害が再燃する。同年 5 月 17 日には、パリ大司教アルレー・ド・シャンヴァロン Harlay de Champvallon によってニコルは田舎のポール・ロワイヤルから追い出される。ニコルは 5 月末にはフランスを離れ、7 月にブリュッセルに到着し、同月 9 − 10 日にアルノーと会う。アルノーはニコルとともにオランダへゆくことを望んだが、ニコルは誘いに乗らなかった。ニコルは一人ベルギーのリエージュに向かい、1679 年の夏をそこで過ごす。

リエージュにてニコルはシャンヴァロンに宛てて、自身の恭順を示し、フランスへの帰還の許可を求める手紙を書く。しかし結果は芳しくなかった。のみならず、この手紙は、ジャンセニストの中でも厳格な人々には、ポール・ロワイヤルが苦境にある中での裏切りにしか見られなかった。彼らからの批判は晩年にまで続くことになる。

ニコルはスダン、ムーズと移動したのち、ルクセンブルクのオルヴァル大

修道院で隠棲しようとする。だが、彼のシャンヴァロン宛の手紙を批難する手紙が大量に送られたことにより不眠症に陥る。不眠症解消のために「ニコル氏の弁護」を執筆したほどであった。序文まで執筆されていたが、出版はされなかった。

1681 年頃、シャンヴァロンにより、ニコルは秘密裏に故郷シャルトルへと帰還することが許される。1683 年にはパリへ戻り、そこで最後の十数年を過ごした。

次に『道徳論』の成立過程について見ておこう。『道徳論』はピエール・ニコルの主著の一つである。様々な機会に書かれた数々のテクストを再編成したこの著作は著者の存命中は四巻本であった。ニコルの死ぬ 1695 年には第一巻がすでに第七版まで版を重ねており、その海賊版もまた無数に出版されていた。

版元であったデプレ Desprez 書店にとって、『道徳論』は稼ぎ頭であった。そのため、ニコルの遺稿をまとめてさらに二巻が出版される。さらに、手紙、聖書から発する道徳的省察、神学についての問答などのニコルの他のテクストを『道徳論』に加えて書店は出版し続けた。結果、1765 年に、著者の存命中は四巻本であった『道徳論』は、二十三巻分のニコル自身のテクストに伝記『ニコル氏の生涯』、ニコルの宗教思想の要約である『ニコル氏の精神』の二冊を加えた二十五巻本にまで増大する。

これだけ売れ、増補され続けたという事実は『道徳論』が十七、十八世紀において広く受け入れられたことを示している。実際、セヴィニェ夫人 Mme de Sévigné、ピエール・ベール Pierre Bayle、ヴォルテール Voltaire といった名だたる著作家達がこの書を道徳的思索のモデルとみなしていた。

上記の成立過程から見て取れるように、最終的に『道徳論』は 1650 年代から 1695 年までのおよそ半世紀にわたって書かれたもので構成されている。いわば様々な主題について、様々な形式のもとで、様々な読者を想定して書かれたテクストの集大成である。そのため、個々のテクストについてはいざ知らず、『道徳論』全体の思想的特徴及びそれによって知られるニコルの思

想的特徴を一義的な形で明らかにすることは困難である。とはいえ、『道徳論』において同時代のモラリスト文学同様に道徳的な教えと習俗研究の中間的な考察が行われていることは間違いない。

最後に、「プリズム」の意義について見ておこう。死後出版のこの作品は短いながらも強烈な魅力を放っている。事実、二十世紀にフランスで編まれたニコルのアンソロジーの二つ、二十一世紀に編まれたアンソロジーの一つにこの小品は収録されている。

その魅力はプリズムという主題にあるだろう。視覚、光学に対する学問的興味が高まった十七世紀において、プリズムもまた多くの人が研究の対象とした。本エセーでは、この時代を特徴付ける事物を、人間の心の堕落の象徴として、二つの側面から用いている。一つめの側面は物質としてのプリズムに対する評価である。プリズムは光を屈折させることにより、事物に様々な色を投影して、視覚的に心地よい世界を作り出す。しかし、プリズムが作り出す美を正当に鑑賞できるのは子供だけである。なぜなら、成長するにつれて人間の事物の評価基準は傲慢へと移り変わってゆくからだ。事物の美しさ、立派さを人間はもはやほとんど楽しまない。代わりに、自分が対象を所有し、他者がそれを所有していないという事実の認識によって人間は満たされるのだ。故に、視覚的快楽を与えてくれるが、誰もがたやすく入手することのできるプリズムを大人は評価しない。このように、プリズムは、それに対する評価を介して、アウグスティヌス主義の核心の一つである観察者の心の堕落を映し出すものとして提示される。

第二に、ニコルはプリズムを心そのもののメタファーとして用いている。プリズムによって事物は美しく色付けられる。また、プリズムを通して見ることで事物は反転して見える。このように通常とは異なる事物の認識をプリズムはもたらす。心も同様の機能を持つ。極度に清貧を尊ぶ人の心には、宝石も汚泥のように思われる。真のキリスト教徒には現世での栄達は救済のための障害でしかない。同じ対象に異なった価値を見出させる媒介として、プリズムと心は重ね合わされる。この時重要なのは、肉眼で見る色もプリズム

を介して見る色もどちらも現実の認識であるが、どちらが色を正しく認識する方法なのか確定することはできないという立場をニコルが取っていることである。これは一見すると現代的な相対主義の立場をとっているように見える。だがそう考えるのは早計であろう。むしろ対象へ私たちが抱く判断を正当な基準とすることに対する警鐘と捉えるべきである。では、仮に対象を判断する真の方法があるとしたら何なのか。それはおそらく真のキリスト教徒の心、慈愛に満ちた心を通した認識である。

このように、「プリズム」は、十七世紀当時注目を集めていた科学的主題を用いて、文学的にニコルの思想を示したテクストといえる。また、そこに見出される認識の多様性という考え方は（それ自体をニコルが肯定しているわけではないにしても）現代にも通じる問題意識をニコルが持っていたことを示している。以上から『道徳論』の入り口として本テクストは質、量ともに適当なものだと言えるだろう。

凡例

1. 翻訳の底本は以下の通りである。
Pierre Nicole, « Le Prisme, ou Que les différentes dispositions font juger différemment des autres objets », dans *Les Essais de Morale, contenants divers traités sur différents sujets*, cinquième volume, 1733, pp. 83-94 ; dans *Les Essais de Morale*, Genève, Slatkine reprints, 1971, 4vol., vol. 1, p. 440-443.
2. 注は全て訳者によるものである。

I

この認識[1)]の多様性はガラス製のプリズム[2)]の例によってよりはっきりとあらわれるだろう。ガラス製のプリズムは三種類の人々から全く違った様に見られる。プリズムが子供に与えられたなら、子供は一日中、さらには数日にわたってさえも、プリズムで楽しむことだろう。子供はプリズムを通して

見出される色の美しさに魅了され、この宝を所有しているが故に自分は幸福だと思うだろう。

プリズムが哲学者[3)]に与えられたなら、哲学者は、色の本性、光の屈折と反射、対象の反転、短縮[4)]及び隔たり[5)]に関する無数の思索の題材を見出すことであろう。

もし、哲学に少しも関わっていない[6)]世俗の人々にプリズムが与えられたなら、彼らはプリズムをぞんざいに子供の楽しみだとみなすだろう。実のところ、彼らもこの色の多様性のうちになんらかの美を見出すだろう。しかし、それは見かけに過ぎないという考えが、彼らにガラスを、なんの愛着も無しに、直ちに放棄させるだろう。

故に、プリズムの見方によって、どの種類に人が所属しているかが見えるのである。

II

世俗の人々は心密かに哲学者たちと子供たちを軽蔑している。彼らは、空虚で、内容空疎な思索に耽っている者として哲学者たちを軽蔑し、虚しい喜びに執着し、その喜びの堅実さのなさを見ようとしない者として子供たちを軽蔑するのだ。哲学者たちは、精神と自然の美に少しも刺激されない者として俗世の人々を軽蔑し、感覚の対象にあまりにも刺激されすぎる者として子供たちを軽蔑する。子供たちは誰も軽蔑しない。彼らは、深く考えること無しに、彼らを引きつける対象の美しさを享受する。[7)] そして私が思うに、これら三種全ての態度に欠陥があるにしても、子供の態度は他の態度よりも欠陥が少ない。

III[8)]

確かなことは、これらのプリズムを通して人が見るものは、人間が自らの仕事によってなしうるどんなものよりも、それ自身としてより美しいということ、そして、人間の仕事はこの道具があらゆる物体に瞬時に与える輝きに

匹敵することはできない、ということである。ゆえに、この世界にこのようなプリズムが一つしかなく、他にプリズムを作ることができないならば、全てのダイヤモンドをひっくるめてもプリズムの価値に匹敵することはないであろう。唯一つしかないプリズムは一つの王国に相当する価値を持つだろうし、その所有者となる者は人間の意見における幸せ者になることだろう。しかし、プリズム一つを持つことほど容易いことはないのだから、この実に貴重な道具は人間の意見によって子供にとっての楽しみの役割を果たすことに追いやられている。そして、年取った人は、プリズムにこだわり、プリズムを重視することにいくばくかの恥ずかしさを覚えるのだ。

IV

その理由は、非常にありふれていてかつ非常に安価なので、プリズムはそれを持っている人を、それを持っていない人と全く区別しないからだ。というのも、プリズムを持つことは、単に各々にしか関係がないからである。「プリズムを持つとは運がいい」とは誰にも言わない。これは万人の前にある[9]至福である。しかし、この至福は、人間の心の堕落のせいで、人間を少しも刺激しない。人間の喜びは他者が享受していないものごとを享受することである。人間の幸福を共通のものにしてみよう。人間にとってその幸福は軽蔑すべきものとなる。珍しさが幸福の価値をなしている、そして、人間が自分は幸せだと思うためには、珍しさによって自分が不幸だと感じている他人[10]を見なくてはならない。人間が自身の観念において自分自身に与えているこの優越[11]が人間のあらゆる楽しみ、あらゆる喜びをなしている。

V

もし誰もがいくつも宮殿を持っていたなら、宮殿を持っているからといって幸福だと感じる者は誰もいないだろう。誰が、太陽、星々、雲、平野、[12]山々を見ることを、自身の立場の長所に数え入れるだろうか。あらゆる自然の美しさは私たちにとってはつまらないものだ。自然の美しさは万人に共通

のものなのだから。そして、人間の持つ卓越することへの欲望は、人間に、自身の喜びを花壇、並木道、板羽目、花瓶、何かしらの飾りに縛り付けるように仕向けた。これらのものは万人の前にある共通の対象より美しさの点で無限に劣るというのに。そして、こうしたことが起きるのは、貧しい人はこれらの対象を享受せず、金持ちはこれらのものを持つことで称えられるからなのである。

VI

故に、人間の喜びは虚栄の喜びと悪意の喜びである。他人が持つことができないからといって、特定のものを過度に讃える人間の誤った判断にこの喜びはしっかりと支えられている。この喜びは私たちを喜ばせる対象のうちに実在するものではない。それは、他人が持っていないものを私たちが持っているのを見ることにあるのだ。こうした傲慢の喜びは本質的に人間が求めてやまない喜びである。人間は他のあらゆる喜びに嫌気がさす。しかし、人間はこの傲慢の喜びに決して飽きることはない。なぜなら、感覚の喜びには限度がある[13)]が、傲慢の喜びには限度が全くないからだ。

VII

しかしながら完全に私たちの想像力に依存するものによりも、私たちの想像力から独立しているものの方に実在する何かがあることは確かである。その結果、子供たちは感覚の対象によって強烈に心を動かされ、あの色の多様性を子供達に示す道具を用いて見ることに大きな喜びを感じる。この点において子供達は、子供達を軽蔑する年長の人間よりも一層思慮分別がある。なぜなら、年長の人間は自身の傲慢の糧を感覚の対象に見ておらず、想像力と虚栄のあの喜びのために情念は、年長の人間たちを、より実在し、より堅固で、より無垢なあらゆる美しさを感じとれなくしてしまっているからである。

VIII

このように、年齢は私たちをただ思慮分別に欠けたものにするだけでしかない。理性の発展と呼ばれるものは理性の衰弱なのだ。子供の単純な無知から抜け出すことで、私たちは無知よりもずっと有害な誤りと幻想の中に落ち込んでいる。私たちは一層虚しく、一層有害な情念によって自然な情念の息の根を止めるのだ。そして、私たちが、子供たちを楽しませるもので喜ぶのを止めるのは、私たちが子供よりも一層腐り、一層堕落した心を持つからにすぎないのだ。

IX

大きな悪の現象[14)]が特定の情念において善であることがある。そして、十分に大きな善の証拠が別の情念においては悪であることがある。幼年期の虚しい楽しみを乗り越え、もはやそれに喜びを感じないことは一つの善である。しかし、その善は、多くの人々において、悪意もしくは傲慢を満足させる対象への執着、もしくはより罪深い何らかの別の情念という非常に有害な原因に由来する。自然の美しさにあまりにも刺激されるのは一つの欠陥である。しかし、それは十分に大きな善の印である。というのも、それは有害な情念で甚だしく満たされているわけではないことの兆しだからだ。こういうわけで、矯正しなくてはならないのは、最後の欠陥である。[15)]

X

視覚の喜びから私たちを遠ざけることが理性には容易いことが、視覚の喜びが十分に感覚的ではないことを示している。なぜなら、とどのつまり、視覚の喜びが非常に快く、非常に生き生きしていたならば、視覚の喜びは、私たちを夢中にさせ、いくつになっても私たちを楽しませていたであろう。なぜなら、いくつになっても私たちは目を持っているのだから。ガラス製のプリズムは私たちに視覚の喜びの真の範囲を教える。おそらく、私たちが選ぶ

のであれば、私たちの目が私達にあらゆる自然の対象を示すようにあらゆる自然の対象を見ることよりも、プリズム越しに私達にあらゆる自然の対象が現れるようにあらゆる自然の対象を見ることをよりよく好むことだろう。しかし、この道具を目の前に保つことの煩わしさが、私たちに、通常、プリズムを使うよりも、プリズムなしであらゆる自然の対象を見ることをより好ませる。このことは、次のように結論する理由となる。この世にある最も美しい対象を見ることが与える喜びは、目の前に何かを保つといったようなこの上なく小さな煩わしさよりも考慮に値しないのである。喜びに結びついた新しさは苦痛に勝る。新しさが喜びに結びついていない時、苦痛は喜びに勝る。[16] そういうわけで、私たちはまず、束の間、喜びとともにあの色の多様性を目にする。そして、私たちは十五分もこの多様性を見つめることはできないのだ。

XI

プリズムを通じて見られる色は目によって見られる色と同様に実在するものである。なぜなら、私たちの目は特定の方法で私たちに対象を表示する特定の眼鏡[17] でしかないからである。その方法は私たちがプリズムを通じて対象を見る方法と同様に対象を真に見る方法ではない。[18] しかしながら、私たちの目は私たちが用いる通常の道具であるので、私たちは、私たちの目を通じて私たちが見る色を真の色と呼び、プリズムのような非日常的な眼鏡を通じて私たちが見る色を偽の色、見せかけの色と呼ぶ。

私たちはこれと同じことを、私たちの情念の対象においてもなしている。不変の、永続的な、共通した情念の対象は、思慮分別があり、真剣で、重要であるように私たちには見える。私たちがそれについて間違っているのではないかと警戒することは決してない。しかし、情念が日常的でないものである時、私たちは、対象に対して抱いている執着に誤り、無分別、錯覚があると強く感じる。あの貴族は、自身の義務を一顧だにせずに、純粋な野心から一生懸命に攻撃に参加することだろう。彼は賢く、勇敢で、器の大きな者

である。あの別の貴族は屋敷にいる。世間の人に従えば、彼は馬鹿者で、卑しい精神を持つ。なぜなら、共通の意見は真理の代わりとなり、共通の評価は、偉大さの代わりとなるからだ。そして、誰であれそこから離れるものは、人間の判断によれば、無分別と卑しさのうちに落ち込むのである。[19)]

XII

プリズムを用いてあらゆる対象が転倒しているのを見るためには、私達に、それらの対象が色付けられているのを見せる方法とは別の方法でそれらの対象を見させるだけで十分である。私たちの視覚の光をただ変更することで、私達にとってあらゆる自然は一変する。これは、信仰が私達において生み出すことの十分に美しい似姿である。世界において新しいことが何も起きていないのに、信仰は私たちの精神の目に、世界をひっくり返す。信仰は私たちに、大きいものを小さく見せ、小さいものを大きく見せ、金持ちを貧しく見せ、貧しいものを金持ちに見せ、幸福なものを悲惨に見せ、悲惨なものを幸福に見せる。至福と名誉の頂点に登るために私たちには上がっているように思われていたそれぞれの階段が、悲惨の深淵のうちに降ってゆく階段のように思われる。

XIII

外的な対象が色付けられるのは、私たちに外的な対象を見させる光線がプリズムを通り、通過中に折れ曲がる時だけである。これは屈折と呼ばれている。光線が通る中間物が、光線にこの輝きを与えている。このことがなかったならば、光線はいつも通りに私たちに現れるだろう。同様に、私たちの心を通ったものよりも私たちの精神に生き生きと、快く思われるものは何もない。心は、対象の自然な色を変質させるあの中間であり、私たちに、対象が実際にそうであるのとは別な風に対象を思わせる。そして、このことはあらゆることについて同じである。なぜなら、プリズムは、最も美しいものも、最も醜いものも同じように、あらゆる種類の対象を色づけする。泥を宝石に

変えるこの中間を通じて見る時、不快なものは何もない。同様に、私たちの心を通った最も卑しい対象は、私たちの心において、それらを私達にとって快いものとする偽りの輝きと色を受け取ることができるのだ。

XIV

プリズムによって対象が転倒したのを見る時、もはや対象が色付けられているのを見ることはない。信仰の視覚を通じて世界を見る時、世界は私達には輝きも快さもないように見える。輝きも快さもものそのもののうちにはなかったのだ。そうではなく、私たちの心の堕落から輝き、快さは取り入れられていたのである。

XV

もしある人が、世界が転倒したのを見るために、実際に世界がひっくり返ることを望んだなら、その人はプリズムを手にし、世界の秩序を混乱させることなく自身の欲望を満足させるよう祈らねばならない。視覚の変化は全自然の転覆と同じ効果をなすであろう。同様に、幾人かの本性的な悪人は現世の問題において、絶えず転覆が起きることを望むだろう。そして、彼らは車輪の上にいるものが車輪の下で見出されるのを望むのだろう。[20] この悪意から彼らを癒すために、彼らに次のように言わねばならない。それほどの苦労をすることなく、この大変化を見たいのであれば、対象を変えると主張する代わりに、彼らの視覚だけを変えるだけで良い。この視覚の変化は現実の転覆と同じ結果を産むことだろう。[21] 彼らは彼らに嫉妬を引き起こさせる人たちが悲惨な状態にあるのを見るだろう。しかし、世界を彼らの目に転倒させるこの信仰の視覚で彼らが満足しないのであれば、それは、彼らが彼らの嫉妬の対象である人たちが低くみなされているのを見ることを望んでいる理由が、単にそれを見ることで楽しみ、彼らの没落において有害な喜びを得るためでしかないからである。これに対して、信仰は、私たちに、世界の偉大さが悲惨のうちにあるのを見せつつも、そこから私たちが喜びを得ることを妨

げる。そしてむしろ、私たちのうちに哀れみの情を掻き立てるのだ。このように、人間の心の悪意が求めるものは信仰ではないのである。

［注］

1） 原語は sentiments。*Furetière* には精神的なことに対して使う場合、「魂が物事を考察する際に用いる様々な視線、この視線が魂に物事に対する様々な観念や意見を抱かしめる」de diverses vues dont l'âme considère les choses, qui lui en font concevoir de différentes idées ou opinions と定義されている。

2） 十七世紀は視覚に対する科学的興味が強く熱を帯びていた時代であった。1665 年にロバート・フック Robert Hooke による顕微鏡を通じて見た様々なもののスケッチ図『顕微鏡図譜』*Micrographia* が公刊される。1667 年には屈折についてのデカルト Descartes とフェルマ Fermat の間の論争を含むデカルト書簡集第三巻が出版される。1668 年から 1675 年にかけて雑誌「ジュルナル・デ・サヴァン」*Journal des Savants* にはボイル Boyle、ニュートン Newton、ホイヘンス Huygens、ロメール Römer らの視覚研究についての記事が見られる。
このような状況下にあってプリズムが主要なモチーフとなっているのを見るとき、私たち現代人は即座にニュートンが 1666 年に行ったプリズムによる分光実験を想起することであろう。しかしながら、ニュートンの実験は 1672 年のロンドンへの報告以降 1704 年の『光学』出版までの間ほとんど知られていなかった。故にプリズムという主題がニュートンからの影響を受けているとは考え難いとアントワーヌ・ロラン Antoine Rolland は指摘している。ロランはむしろ、デカルトの弟子の一人ジャック・ロオー Jacques Rohault が 1659 年から 1671 年にかけて行なっていた、広く一般に開かれていた講演会にプリズムのモチーフの源泉を見ている。本文 I において描かれる三種類の人間の姿は実際に講演会の場に来た人々の姿を反映しているのではないかとロランは指摘している。以上、Antoine Rolland, « L'Essai de Morale *Le Prisme* : Nicole, témoin de l'optique en son temps », dans *Chronique de Port-Royal*, n°. 45, 1996, pp. 187-196 に基づく .

3） 哲学 Philosophie は今でこそ世界、人生の根本原理を追求する学問とみなされているが、十七世紀当時はいわゆる自然科学も研究対象としていた。

4） 原語は raccourcissement。*Furetière* を見ると「短縮されて描かれたもの」Ce qui est peint en raccourci という定義がある。同辞書の raccourcir の定義を見ると、「絵画の用語、絵画の前面にあるものから大きく、もしくはわずかに離れているように図像を見せたい場合に、遠近法の規則に従って縮減された図像をいう」un terme de Peinture et se dit des figures qu'on diminue selon les règles de la Perspective,

suivant qu'on les veut faire paraitre plus ou moins éloignées de ce qui est sur le devant du tableau とある。

5） 原語は éloignement。*Furetière* には「絵画の用語として、遠近法において、遠くに見える絵画の部分」en termes de Peinture, est la partie du tableau qui se voit en lointain, qui est en perspective という定義が見出される。

6） 原語は ne se mêlent point。*Furetière* によると、mêler は「人が没頭している幾らかの種類の行為について話す」en parlant de plusieurs sortes d'actions où on s'applique 際に用いられる。用例として「望まれない限り他人の問題に首を突っ込むべきではない」Il ne faut point se mêler des affaires d'autrui, sans qu'il le veuille などがある。

7） 原語は jouir。この言葉はニコルやパスカルのようにアウグスティヌスから思想的影響を受けている著述家において注意すべき言葉である。というのも、この言葉は即座にアウグスティヌスの有名な区別 uti /frui、すなわち usage / jouissance という区別を想起させるからである。uti=usage は対象を愛すべき目的のために用いることであり、frui=jouissance は対象それ自体を愛することである。uti / frui というアウグスティヌス的分類とそのパスカルにおける受容については Philippe Sellier, *Pascal et Saint Augustin*, Paris, Armand Colin, 1970 ; Paris, Albin Michel, « Bibliothèque de l'Évolution de l'Humanité », 1995, pp. 152-156.

8） III 節では傲慢を中心的な基準とする人間の堕落した心による価値判断の転倒が具体的に描き出されている。プリズムは人為的には獲得できない美の体験をもたらす。だから、プリズムが希少な存在であった場合、有益かつ希少なものであるプリズムは、所有することが幸せの印となる程に高く評価される。しかし、現実にはプリズムは平凡なものである。そのため、その美的価値にもかかわらず、評価されない。それどころかその美を楽しむことが恥とさえなる。極端な言い方をすれば、美は対象の希少性のもとでしか正当に評価されないという事実がここで指摘されているのだ。

9） 原語は exposée。

10） 珍しいものを所有していないために自らを不幸だと感じている、という意味。

11） 原語は préférence。*Furetière* は「それによって物事の利点について判断し、あるものに別のものよりも優位を与える行為」Action par laquelle on juge du mérite des choses, et l'on donne avantage à l'une sur l'autre と定義している。

12） 原語は campagne。現代においてこの言葉は都市 ville に対する田舎の意味を第一に想起させるが、海 mer、山 montagne に対する平野の意味も持つ。*Furetière* は第一に「都市、山、森、その他自由な視界を妨げるものがない広大に広がった土地」Vaste étendue de terre où il n'y ni villes, ni montagnes, ni forêts, ou autre chose qui empêche la liberté de la vue という意味を与えている。

13） Cf. パスカル『パンセ』断章番号セリエ版 230- ラフュマ版 199- ブランシュヴィック

版 72（以下 S, L, B と略記）「過度の喜びは不快であり、音楽における過度の協和音は不快にする、そして、過度の親切は不快にする」Trop de plaisir incommode, trop de consonances déplaisent dans la musique et trop de bienfait irritent。以下、『パンセ』からの引用は Blaise Pascal, *Pensées, présentation et notes par Gérard Ferreyrolles, texte établi par Philippe Sellier d'après la copie de référence de Gilberte Pascal*, Paris, Livre de Poche, 2000 に基づく。

14） 原語は effet。私たちが直接認識するもの、すなわち現象はそれ単体で存するのではなく、現象を引き起こした原因が存在する。この考えはパスカルの『パンセ』、とりわけ「現象の理由」Raison des effets とパスカルによって名付けられた章で展開されている。

15） 現象に見られる欠陥ではなく、現象を引き起こす欠陥を矯正せよ、ということ。Cf. パスカル『パンセ』S125-L91-B336「民衆のように語りながらも、裏の考えを持ち、それによって全てを判断しなくてはならない」Il faut avoir une pensée de derrière, et juger de tout par là, en parlant cependant comme le peuple。

16） 観察者の主観に基づく対象の新しさ、古さが観察者の判断に影響を与えるという指摘はパスカルにも見られる。『パンセ』S78-L44-B82「古い印象だけが私たちを騙すことができるのではない。新しさの魅力もまた同じ力を持つ」Les impressions anciennes ne sont pas seules capables de nous abuser, les charmes de la nouveauté ont le même pouvoir。

17） 十七世紀においてすでに眼鏡は日常的に使われていた。当時の眼鏡にはツルがなく、使用時には目の前に指で固定するか、鼻の上においておくしかなかった。ニコル自身視力が悪く、眼鏡を使っていたと考えられる。彼は自分の視力の問題について次のように書いている。*Essais de Morale, ou lettres écrites par feu M. Nicole*, tome Huitième, Lettre LXXV, À Paris Guillaume Desprez, 1733, p. 121 :「〔訳注：シトー会の上長から命じられた写本の検討が進まないことの釈明の手紙において〕〔…〕ですが、主な難点は私の視力が弱いことにあります。私の視力は写本とうまく合いません、特に字の小さな写本や外国の文字で書かれた写本には合わないのです。そのせいで、そういう類の写本を四ページも読むと続けることができなくなるのです。」*Lettres de feu M. Nicole, pour servir de Continuation aux deux Volumes de ses Lettres*, Lettre XL, 1743, p. 177 :「44 年前、神は似たようなことのために〔訳注：新約聖書に関する著述の検討〕私の視力の大半を奪うことをお望みになられたのです。なぜなら、そのきっかけとなった活動は、ヘブライ語で聖書を全部読もうという夢のような計画だったのです。半分は終わらせたのですが。そのせいで、視力は弱くなり、注意がいるものに目を向けるや否や、すぐに目がダメになってしまうようになったのです。こうして、この時から、バーゼルの印刷物のように、略記や凝った表現があるあらゆる印刷物のヘブライ語、ギリシア語、あ

らゆるイタリック体、そして私の知らないあらゆる言語をも放っておくことを余儀なくされたのです。そこに強烈に目を向けることが必要なのですから。」

18）ニコルはここで明らかに認識自体の正しさと認識の方法の正しさを区別している。認識される色は実在する réelles。故に認識の方法としての肉眼もプリズムも間違ってはいない。しかし、両者の認識は完全ではない。少なくとも、肉眼による色の認識をプリズムでは獲得できないし、逆もまた然りであるからだ。故に、肉眼もプリズムも、色の認識の方法としては不完全であると言える。こうして、両者ともに真の方法 véritable manière ではないとみなされる。同様の議論をパスカルにも見出すことができる。Cf. パスカル『パンセ』S614-L733-B862。

19）習慣が人間の判断に影響を及ぼすことを指摘している。同様の発想はパスカルにも見出される。Cf. パスカル『パンセ』S661-L821-B252。なお、パスカルにおける習慣の主題については山上浩嗣『パスカルと身体の生』、大阪大学出版会、2014年、pp. 33-66において詳しく論じられている。

20）上の地位にいた人が下の地位に落ちるのを望むということ。

21）「現実の転覆」の原語は un renversement réel。外的事物の変化によって獲得される新たな認識も、外的事物に対する主観的な認識方法が変化することによって獲得される新たな認識も、どちらも現実 réel であり、主観の範囲において真だとニコルは考えているようだ。

［参考文献］

BARRIER (Thibault), « Les Travers de l'éclat », dans Pierre Nicole, *Œuvres Morales, édition, préface, notes et annexes Thibault Barrier, avant-propos Denis Kambouchner*, Paris, Éditions Manucius, « Le Philosophe », 2014, pp. 15-48.

GUION (Béatrice), *Pierre Nicole moraliste*, Paris, Honoré Champion, 2002.

JAMES (E. D.), *Pierre Nicole, Jansenist and Humanist. A Study of his thought*, Nijhoff, La Haye, 1972.

KAMBOUCHNER (Denis), « Le goût de Nicole », dans Pierre Nicole, *Œuvres Morales, édition, préface, notes et annexes Thibault Barrier, avant-propos Denis Kambouchner,* Paris, Éditions Manucius, « Le Philosophe », 2014, pp. 9-14.

PASCAL (Blaise), *Pensées, présentation et notes par Gérard Ferreyrolles, texte établi par Philippe Sellier d'après la copie de référence de Gilberte Pascal*, Paris, Librairie Générale Française, « Le Livre de Poche classique », 2000.

ROLLAND (Antoine), « L'Essai de Morale *Le Prisme* : Nicole, témoin de l'optique en son temps », dans *Chronique de Port-Royal*, n°. 45, 1996, pp. 187-196.

SELLIER (Philippe), *Pascal et Saint Augustin*, Paris, Armand Colin, 1970 ; Paris, Albin

Michel, « Bibliothèque de l'Évolution de l'Humanité », 1995,
THIROUIN (Laurent), « L'Image de Pierre Nicole (La Fortune des Essais de Morale) », dans *Chronique de Port-Royal*, n°. 45, 1996, pp. 303-332.
——— « L'originalité philosophique de Pierre Nicole », dans *Chroniques de Port-Royal* n°. 61, 2011, pp.129-147.
——— « Introduction » dans Pierre Nicole, *Essais de Morale, choix d'essais introduits et annotés par Laurent Thirouin*, Le Kremlin-Bicêtre, Les Belles Lettres, « encre marine », 2016, pp. 9-31.
山上浩嗣『パスカルと身体の生』、大阪大学出版会、2014年。

［辞書、事典］

FURETIÈRE (Antoine), *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots français, tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts*, La Haye et Rotterdam, Arnout et Reinier Leers, 1690.
Dictionnaire de Port-Royal, élaboré sous la direction de Jean Lesaulnier et Antony McKenna, Paris, Honoré Champion, "Dictionnaires et références", 2004.

［動画］

SAPR Société des Amis de Port-Royal, *(55) Les Minutes de Port-Royal, "Pierre Nicole, ou de l'art d'être ordinaire"*, https://www.youtube.com/watch?v=hQpokurQgSQ&t=760s (2020年7月8日アクセス)

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Pierre Nicole, « Le Prisme, ou que les différentes dispositions font juger différemment des autres objets » : présentation et traduction en japonais

Hirofumi Kawakami

Pierre Nicole est connu comme théologien, moraliste, théoricien de l'éducation et penseur représentatif de Port-Royal. Les *Essais de morale* ont connu un succès considérable aux XVIIe et XVIIIe siècles. Mme de Sévigné et Voltaire les ont beaucoup estimés. Cependant après XIXe siècle (et peut-être jusqu'à maintenant), on a déprécié le moraliste et ses œuvres. Cette tendance est, par exemple, montrée par la critique péjorative de Barbey d'Aurevilly. Bref, au fur et à mesure du cours du temps, le jugement sur le moraliste se modifie. Cela reflète évidemment le changement de la morale et la littérature françaises.

On trouve ici la traduction en japonais d'un essai des *Essais de morale*, « Le Prisme, ou Que les différentes dispositions font juger différemment des autres objets ». Cet opuscule est posthume. Au XVIIe siècle, beaucoup d'intellectuels (comme Descartes et Newton) s'intéressent à la vue et à l'optique. Le prisme revêt une grande importance pour eux. Dans son essai, le moraliste s'en sert de deux façons : l'une permet de traduire l'estimation des hommes. Le prisme permet d'avoir une vision des choses véritablement belle. Cependant cette fonction n'est pas si importante. Parce que, l'homme après la Chute n'aime que ce qui le remplit d'orgueil. Une chose commune, comme le prisme, semble sans valeur puisque sa possession n'élève pas le possesseur au-dessus des autres.

L'autre est la métaphore du cœur. Si nous voyons un objet à travers le prisme, nous le voyons plus beau parce que le prisme le colore. Il en va de même pour le cœur. Nous voyons une chose sans valeur comme précieuse parce que nous la voyons avec le cœur.

On peut conclure ainsi que l'opuscule « Le Prisme » nous montre bien l'intérêt pour la science de l'auteur, son talent littéraire et sa pensée augustinienne.